農民の旗の下に

戦後農民文学運動の二十五年

堀　江　泰　紹　著

日本農民文学会

農民の旗の下に

戦後農民文学運動の二十五年

堀 江 泰 紹

日本農民文学会

著者紹介

1933年福島県生れ、1962年法政大学第一文学部日本文学科卒業。日本農民文学会の創立に参加。1963年から2年間日本農民文学会事務局を担当、雑誌『農民文学』の編集に携り、1974年日本農民文学会議長、1975年同事務局長を歴任。つねに農民文学会の中枢にあって農民文学運動のあり方を問い続ける。著書に、堀江泰紹第一創作集『黒い川の流れ』(私家版)がある。

農民の旗の下に

昭和五十七年十二月十日発行

定価　一五〇〇円

著者　堀江泰紹

発行所　日本農民文学会
東京都新宿区岩戸町一六
(メジャー神楽坂四〇二号)
オリジン出版センター内

発売元　株式会社町田ジャーナル社
東京都町田市旭町一の一の一
電話〇四二七(二六)八四四七番
振替口座番号東京九—五〇六〇八番
郵便番号一九四

農民の旗の下に

戦後農民文学運動の二十五年

堀　江　泰　紹　著

日本農民文学会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

著者紹介

1933年福島県生れ、1962年法政大学第一文学部日本文学科卒業。日本農民文学会の創立に参加。1963年から2年間日本農民文学会事務局を担当、雑誌『農民文学』の編集に携り、1974年日本農民文学会議長、1975年同事務局長を歴任。つねに農民文学会の中枢にあって農民文学運動のあり方を問い続ける。著書に、堀江泰紹第一創作集『黒い川の流れ』(私家版)がある。

農民の旗の下に

昭和五十七年十二月十日発行

定価　一五〇〇円

著者　堀江泰紹

発行所　日本農民文学会
東京都新宿区岩戸町一六
(メジャー神楽坂四〇二号)
オリジン出版センター内

発売元　株式会社町田ジャーナル社
東京都町田市旭町一の一の一
電話〇四二七(二六)八四四七番
振替口座番号東京九—五〇六〇八番
郵便番号一九四

農民の旗の下に

戦後農民文学運動の二十五年

堀 江 泰 紹

日本農民文学会

かつて山室静先生は五十歳になった記念に『遅刻抄』という作品集をまとめて出された。わたしも山室先生のひそみにならってこの本を出そうと思いたった。

五十歳という年齢は、ある意味では刀折れ矢尽きた感慨を深化する年齢である。いまわたしの精神的・肉体的状況はそうした感慨の中にある。心境は草庵に入りたい心境であるが、そうした勝手はわたしごとき俗人に許されるわけもない。

ところで、わたしは十四歳の夏、肺結核を患い、二十歳まで生きながらえるだろうか、という強迫観念におそわれ、夜もねむることができない日々を送った。

その病いが癒えても家業の農業を継ぐ自信が全くなく、志を別に立てて上京したのが二十二歳の春、昭和三十年四月のことであった。生活の資を日本橋の蠣殻町にあった新聞販売店の新聞配達に求め、夜間高校、大学と進んだ。

上京した年の四月、日本農民文学会創立総会が市ヶ谷の家の光会館で開かれ、わたしは早速その総会に出席した。爾来今日まで農民文学運動にかかわって来た。青春時代から今日まで、人生の大半をこの運動で自分を塗りつぶしてきた。

この本に収めた大部分の文章は、その文学運動の折々の証言として読んでもらえれば幸甚である。

わたしは〝農民文学運動〟ということばで表現しているけれども、世間はどうか。〝農民文学運動〟がはたして本当に〝運動〟としてありつづけたのかどうか、ということはここでは問わないことにする。世の中のためになったかどうか、自分にはいったいプラスだったのかマイナスだったの

か。人は一本の道しか歩けないのか。日本人は転向的人間なのになぜ一本の道しか歩けなかったのか。

そうした諸諸の総括ができるほどわたしは情熱的でもなかったし、冷淡でもなかった。そのことの答えはこの本を読んでいただけばわかってもらえると思う。

戦後の農民文学運動はある意味で私生児のような生き方を強いられてきた。従って出版ジャーナリズムにも無縁なところで営為をつづけてきたといってもよい。それでも日本農民文学会は存在し、約四〇〇人の会員が全国にちらばり組織を支え活動をつづけている。

農民文学賞も毎年出しており、今年で第二十六回を数え、文学運動としてそれなりの自己完結をしているといえよう。しかし、それだけにあまりにも井の中の蛙的閉鎖性に呪縛されてはいはしまいか。そんな不安もなくはない。

ここに収録した文章は写植を打った段階で山室先生に読んでいただいた。山室先生の感想は「評論篇の最初の方が少し弱い」ということであった。また「こういう本をまとめて置かれることはあなた自身のため、農民文学界のため意義あること」とも言って下さった。

また、題名の『農民の旗の下に』もあまりに時代がかった題だというご指摘もたまわった。その時わたしは、この題名ははじめから時代錯誤的表現であることを承知の上で、わたし自身が考えつづけて来たうえでの決定であることを先生に申し上げた。そして、この題名にこだわる理由こそ〝わが志〟とでもいうべきものであることも。

なぜなら、この題名によってこれらのガラスの破片にも似た雑文章が魔法にかけられた野菜たちのように農民文学というえたいのしれない形而上の世界に向って収斂していくのだ、とわたし

は信じているからである。

農民文学の旗手たちは、有名・無名を問わず、おしなべて業余作家であり、現代農村の語りべたちである。彼らは文学を生活の手段としてではなく、生きてゆく精神的手段として自らに課している。農民文学の閉鎖性もそうした限界から来ているといえるだろう。

わたし自身を言えば、東京都下の町田市で昭和三十六年から今日まで小さなローカル新聞を発行している。わたしにとって、民衆とのかかわりは農民文学の仲間のほかに、東京多摩の一偶の地域住民との親密な交際の中で行なわれている。その交流の中で多摩地区が巨大開発で美しい多摩丘陵の自然を削り、昭和三十三年に六万余の人口であった都市が昭和五十七年には三十万人に増え、首都圏衛星都市の中でも有数の中堅都市として変身成長をとげた過程をつぶさに見守って来たという体験を持つ。

毎日の新聞やテレビをみていると、国際貿易摩擦の槍玉に日本の農業があげられている。世界経済の嵐の前に日本の農業は風前の灯のようにはかない運命を担っているかにみえる。果してそうか。日本農業の近代化はその理非善悪は別として、ここ十年あまりの高度成長による都市化によって成しとげられたのではないか。そして、この高度経済成長が日本農業を滅ぼす引金にならなければよいがと杞憂している。

農民文学もまた日本農業とともに滅びる運命にあるとしたら、農民文学の拠って来たるその出自によって滅びることを喜ぶべきではないのか、とわたしは思うのである。

国鉄新幹線の相次ぐ開通は、政府の官製キャンペーンとは裏腹に「地方の時代」の終焉を告げ

ている。日本列島全島が都市化してゆく中で農業の生きる道もまた新たに問われるだろう。そうした新しい農業状況の中で農民文学が必要とされるかどうか。わたし自身としてはぜひ新しい語りべたちの出現を待ちのぞみたい気持である。

昭和五十七年十一月

著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この本を読まれる人のために……著者

I

一　評論

新しい郷土文学の提唱……11
第20回総会における編集を中心とした経過報告……16
丸山義二『貧農の敵』についての雑感……23
村落共同体における少数者の位相……39
戦後農民文学運動の総括……48
『気違い部落周游紀行』についての一考察……51
今日の農業とその文学状況……57
地方に生きた文学者……66
梶井基次郎と「檸檬」の周囲……69

II

一　随想

韮山圭介氏と「農民文学」の二十五年……77
農民文学の復権……103
わが吉田十四雄素描……107
吉田十四雄さんと私……110
野良に生きる（斉藤諭吉さんのこと）……114

III

一　書評

生の重さを語る『晩秋記』……121
農民文学の無名戦士たち『近代日本農民文学史』……124
飢餓状況下の開拓生活『湧をたらした神』……127
少国民教育への怨念『ボクラ少国民』……132
高度経済成長の虚構性をあばく『現代貧農考』……134
アクチュアリティ性と大衆小説の間『農村挽歌』……140
自律者の雄々しい旋律『山峡牧歌』……144
農婦の生きざまを活写『山峡の春』……149
民主主義の〈原型〉としての部落『にっぽん部落』……153
自然の恵沢を見直す時『野菜博物誌』……156
純粋天皇制のテーゼを追求『みずから我が涙をぬぐいたまう日』……159
生の哀しみと死と『川蟬』……163
戦後農民像の創造を剔抉『戦後農民文学論』……167
女地主奮戦記を冷徹に描く『なっこぶし』……170
北海道に渡った女性の成功譚『雪と風と青い天』……173
悲しかった幼い日『この風の音を聞かないか』……176

IV

一　感想

「『時』の魔術師の手のひらに」について橋本義夫氏を論ず……181
『日本中世の民衆像』を読む……191
『図書館運動五十年』を読む……202

新しい郷土文学の提唱
―農文創立二十周年を迎えて―

それは雪と氷の郷土
冬は早く訪れ、その白い暴君は長く君臨する
かくて地表は刃物のようにとがり、時折り樹々はえ堪えずしてみづから裂ける
それは萌え出ようとする者と抑えようとする者とのはげしい無言の格闘をしめす

だが、やがて遂に待たれる春がくる
閉された氷の下にも欝々の声をたたぬ川は
そのとき溢れ、みなぎり、押しきって、泥まみれに氾濫する
その泥の中にはげしい青草の香りがある
そんなとき少女は一夜にして大人になり、胸は疼きえくらんで若者の目は近づく春の祭と播種を思ってあつく燃える

それは寒冷と枯瘠の土地

はげしい労働も乏しい収穫でしか酬われぬ貧と苦の郷土
しかも暴君は時折りもう収穫の前にやって来る
まるで貪婪な立毛差押えのように

だが、年々歳々
その飢と寒さの郷土に子供は育ち、少女は身ごもることを止めぬ
そして、よりあたたかき日、より光ある日を待ちのぞんであこがれ、欲し、たたかい
それを生みいだす

山室静氏の「故郷」と題するこの詩から触発されるものは、われわれ日本人のプリミティブな姿としての生活意識であり、きわめて人間的な、様々な人間の可能性を秘めた生の営みである。それはまさに日本的風土を現代的に止揚し、近代的生活意識の変革をめざす農民文学的想像力の現場でもある。農民作家が単に書斉派であってはならないということは、農民文学が自己変革の文学であると同時に、きわめて重く村落共同体と深いかかわりを持つ文学であるからだ（伊藤永之介は秋田の農民のことを想い、真冬も板の間で原稿を執筆したという）。

これまで、日本農民文学会は農民文学賞を二十二人の人人に授賞してきたが、実際に執筆という領域で活躍している人は現在七、八人を数えるにすぎない。これはとりもなおさず、彼ら受賞者が自分のすむ村落共同体との関り方におそらく問題があったのではないかと思われる。それは、

活躍している七、八人の人たちはいま自分の村落共同体又は地域社会に深くかかわって仕事をすすめているからである。

本会は農民文学運動の主体としての文学団体である。昭和三十年四月の創立以来、この二十年間、蹌踉とした二十年間であった。創立に参加した発起人で会に残っている人と言えば、初代事務局長をやった鍵山博史氏と、その後会の実質的なプロモーターとして歴代にわたって事務局長役という自己犠牲に甘んじてきた韮山圭介氏の二人だけである。戦前の農民文学は地主対小作人の関係の中で、地主に搾取される小作人＝貧農の側から描かれることによって、そのレーゾン・デートルが成り立っていたと言えると思う。戦後の農民文学の衰頽は、農地改革によって地主対小作人といった緊張した関係が失なわれたことによると言われるのが今日における一般的見方である。さいきんは〝農民文学〟ということば自体が現代文学の中から市民権を失ないつつあると言っても過言ではないであろう。これについて、薄井清氏は雑誌『農民文学』の十二月号に書いた「現代貧農考」で、戦前の農民文学が〝怒りの文学〟であり、〈貧農像〉に作家がかぎりない文学上の魅力を感じていたと指摘している。

大正十五年、新潟県の木崎村で起った小作争議を支援するために当時の文壇人がそれぞれ一作づつ農民小説を書き、大宅壮一がまとめて『農民小説集』として新潮社より出版したことがあったが、芥川の「一塊の土」などはこの木崎村事件支援のために執筆されたものだと伝えられている。また志賀直哉の初期の作品などを読むと、足尾鉱毒事件に社会的義憤をおぼえた主人公が現地にゆこうとする場面がえがかれているが、木崎村事件は当時において社会的に足尾鉱毒以上に

反響が大きかったらしい（いずれもその時代の末期に発生して社会問題になった点で共通した暗さが象徴的だ）。ぼくの考えでは、農民文学運動が組織される過程を考える時、こうした社会的背景や事件が多分に作用していたにちがいないと思うのである。それがアナーキズムからボルシイビズムに、その間に分裂と弾圧と昭和恐慌と重層することによって、重農主義と軍国主義が野合することを余儀なくされ、生産文学的性格として戦争文学に収斂されていくのは和田伝の「大日向村」に代表される満蒙開拓文学がそれを物語っている。

それはそれとして、農民文学の源流をたどれば、やはり大正末のいわゆる大正ヒューマニズムという素朴な都市文明の否定と、農村の疲弊への同情と、田園への都会人的あこがれが混りあって成立したことが和田伝編の『日本田園文学』（昭和三年刊）の目次を一瞥して一目瞭然たるものがある（農民文学のあいまいさはこの辺から伝統があったのではないかと思われるフシがある）。この本に登場する人々は、国木田独歩、島崎藤村、岩野泡鳴、吉江喬松、有島武郎、中村星湖、中村吉蔵、加藤武雄、小川未明、長塚節、徳富芦花、石川三四郎、田山花袋といった人々である。ここではプロレタリア派の作家はのぞかれているが、注目されるのは小川未明と長塚節の二人である。この二人は傾向として全く正反対であるにもかかわらず、呉越同舟で名がつらねられている。未明はアナーキストとして機械文明否定の立場から文学的出発をした人である。節は周知の如く「土」にみられるように、貧農の生態をあますところなく描いた作家である。

薄井論文は現代に貧農は存在するか、という問いかけから出発しているが、貧農とはちがった形であっても、郷土に住む民衆の中には、まだまだ文学的にも魅力ある人たちがいるということ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com